

事業所名： グループホーム ほほえみの家 A棟

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0372100743		
法人名	社団医療法人 池田記念会		
事業所名	グループホーム ほほえみの家 A棟		
所在地	岩手県滝沢市高屋敷平11-1		
自己評価作成日	令和7年9月1日	評価結果市町村受理日	令和8年1月5日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所は同一法人が経営する老人保健施設と神経科・内科クリニックの隣接地にあり、医師が定期的に往診するなど、福祉と医療が連携を密に図りながら、利用者様が安心して穏やかな生活が送れるよう支援している。現在も感染症対策を継続しながら、少しずつ以前の日常を取り戻すため様々な取組みを行っている。例えば近隣の保育園との交流を図っている他、自治会と草取りを通じて交流をするなど、今まで築いてきた関係性が途切れないように取組みを進めている。また、利用者様がホームに閉じこもることがないようにホーム周辺や敷地外を散歩したり、花見などのドライブに出掛ける等可能な限り外出する機会を設けている。今年の6月より飲食を伴う外出も許可し、利用者様が家族と過ごす時間をもてるように配慮している。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

桜、白樺、栗等の樹木に囲まれ、前庭には季節の花が咲くバラ園もある自然環境に恵まれた事業所である。敷地内に同一法人が運営している介護老人保健施設や神経内科クリニック、ケアプラン作成室があり、医療、介護連携が図られている。運営に当たっては、グループホームの理念「支えあい 励ましあい 助け合い」を職員間で共有し、利用者の生活の様子をタブレットで共有し、利用者一人ひとりにきめ細やかな介護サービスを提供している。運営推進会議委員の助言や提言を受け、事故防止対策、保育園児との交流、徘徊者の連絡対応等を運営に反映させ、また、職員の申し出や職員で作る各委員会の提案を行事や日々の業務に活かしている。さらに、市主催の認知症カフェやオレンジフェスタへの職員の参加等認知症の周知、啓発に取り組むとともに、自治会に加入し事業所の広報誌を回覧板に入れていただき、地域住民に事業所を理解いただけるよう努めている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和7年9月26日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる(参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている(参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらい 3. 家族の1/3くらい 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある(参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている(参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている(参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている(参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている(参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている(参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている(参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている(参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている(参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	常に理念を意識して動けるようグループグループホーム内に掲示しているが、職員間で理解に差がみられる。勉強会を開催するなど理念の理解をさらに深めることができるように話し合いを続けている。	職員で話し合っ決めて「支えあい 励ましあい 助け合い」の理念を実践に繋げるために事業所内に掲示するとともに、職員会議等を通じて職員間で共有し、一人ひとりの状況に沿ったきめ細やかな介護サービスを提供するよう利用者支援に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	感染症対策を継続しており日常的な外出や地域交流は制限されている。感染状況をみながら少しずつではあるが、距離を保ちながら保育園や地域の方々と交流を行っている。	自治会に加入しており、地域の回覧板に家族や利用者の承諾を得て作成した「地域版事業所広報」も入れてもらっている。地域で行っているクリーン作戦には、事業所独自でクリーン月間と位置づけ事業所周辺のゴミ拾いや草取りを職員や利用者、運営協議会の委員、地域の福祉担当の住民が一緒に行っている。近隣の2カ所の保育園の園児が訪れ、踊りを披露しプレゼント交換をする等、利用者の楽しみとなっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	地域で生活している方が認知症の症状で対応が難しいことがあれば、いつでも協力できることを運営推進会議内で伝えている。また、滝沢市からの委託を受け「認知症まちかど相談室」の窓口を設置し、いつでも相談に応じられる環境を整えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている。	委員からの意見を運営に反映できるよう、取り組める内容から順次取り組んでいる。検討事項や2カ月間の取り組み状況を報告し、会議の中で出された意見を職員会議で検討し次回の会議で報告している。	利用者の家族や自治会の会長、自治会福祉部長、保育園園長、地域包括支援センター職員等が委員となり2カ月に1回開催している。活動報告や身体拘束適正化委員会の報告等を行い活発な意見交換をしている。毎回、おやつ作りの見学や地域の交番の警察官を講師に研修を行う等、テーマを決めて事業所の理解をいただけるよう取り組んでいる。	

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ほほえみの家 A棟

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる。	市からの要請で介護家族相談会への参加やまちかど相談室の窓口を設置している。グループホームで解決できない事案については、運営推進会議の場で相談したり、市の担当者と電話で情報共有するなど、日頃から連携を図っている。また、必要な情報はメールで情報提供を受けている。	地域包括支援センター職員を運営推進会議の委員にお願いしており、相談しやすい体制となっている。また、市の担当者とは、電話やメールで情報提供いただくとともに、オレンジカフェや年1回開催しているオレンジフェスタに職員が参加し介護相談を行うなど、行政と協力関係を築くよう努めている。市の介護相談員が2、3カ月に1回来所し、利用者の相談を受けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	安全を確保するためにセンサーを使用しているが、日中は玄関の鍵をかけていない。利用者の表情や仕草から不安な気持ちを察知し、帰宅願望による行動が起きる前に本人の好む活動を提供している。3ヶ月に1回はスピーチロック月間として、スピーチロックの個人チェック表に取り組み、職員間で身体拘束をしないケアの実践に向けて取り組んでいる。	運営推進会議に併せて、身体拘束適正化委員会を年6回開催し、課題を協議し職員に周知するとともに、勉強会を開催し趣旨の徹底を図っている。現在、身体拘束の事例はないが、転倒防止のためA棟3人、B棟2人がセンサーマットを利用している。スピーチロックについては、「スピーチロック月間」を設定し、個人チェック表を用い事例を通して研修をするとともに、「言い換え」を掲示し全職員で気を付けるよう取り組んでいる。防犯のため夜間は、玄関に施錠している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	スピーチロック月間を設けて3ヶ月に1回実施し、会議でも話し合いの機会を持ち意識の向上を図っている。また、勉強会でもアンガーマネジメントについて学ぶ機会を持ち、職員の意識を高める取り組みを行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	グループグループホームに関わりある部分についてはある程度理解しているが、それぞれの制度の持つ役割については十分に理解しているとはいえない。そのため、勉強会や研修に参加する機会をつくり、理解を深めていきたい。		

事業所名 : グループホーム ほほえみの家 A棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	入居の申込みをいただく時は、利用者やご家族が十分に理解し納得していただけるよう時間をかけて分かりやすい説明を心掛けている。また不明な点があるまま申込みに至らないようこまめに確認をしながら話を進めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	利用者からは介護相談員を通すなどして希望を聞きだす機会をもっている。職員も日常生活の中で出される希望や要望を大切に、会議などで話し合いの場を設けている。重要だと思われる事項については運営推進会議でも報告するようにしている。家族からは定期的に電話で状態報告をする時に要望や意見を聞くようにしている。	利用者からは、日常の支援の中で意見や要望の把握に努めている。また、市から介護相談員が来所しており、意見や要望等を把握した場合には共有するようにしている。家族からは面会等来所時や電話した時に確認するよう努めている。「歩かせてほしい」「歯磨き粉等の使用量が多い」等の要望があり、職員会議等で検討対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	毎月1回職員会議を開催している他、必要に応じて会議を開催し職員の意見を聞く機会を設けている。検討課題や要望がある場合は、管理者が上司と相談したり、法人の運営会議に報告し、職員の意見が実現されるよう努めている。	毎月1回開催している職員会議や日々の業務の中で意見等の把握に努めている。業務内容については、生産性向上委員会で検討して対応している。必要に応じて上司や法人の事務長に相談し実現できるよう努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	代表者は、管理者との協議の中で各職員の個々の努力や実績等を把握し、人事考課も加味し、向上心を持って働けるよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	現在はオンライン研修が主だが、徐々に外部の研修に職員が参加できるようにしている。研修報告は職員会議内で行っている。また、職員の自己資質向上のため年4回の勉強会を開催し、働きながら学ぶことができる機会を設けている。		

事業所名 : グループホーム ほほえみの家 A棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	感染症対策の為、今年度は開催回数は少ないが通常では1ヶ月に一回程度定例会があり、職員を交代で参加させている。定例会では他のグループホームと情報交換したり、事例検討や職員の交換研修などを行い質の向上に努めている。また、オレンジカフェやオレンジフェスタなどにも参加をしている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	事前調査の中で生活状況を把握するよう努めている。利用希望者にはグループグループホームで過ごしてもらい雰囲気を見てもらっていたが、現在はグループグループホーム内の立ち入りを制限しているため行っていない。また入居時には家族に『私の基本情報シート』を記入してもらい、情報の把握に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	入居を希望するまでに至った経緯や今困っている事を聞き出し、在宅での生活継続も含めてグループグループホームの利用について説明している。また、現在は面会に制限があるため、定期的に電話報告することで、家族との信頼関係の構築に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	入居に不安のある方は、短時間でもグループグループホームで過ごすように努めていたが、感染症対策でグループグループホーム内への立ち入りが制限されている為、ipadで撮影した動画を見てもらい、不安の軽減に努めている。相談時に緊急を要する場合、他のグループグループホームの空き状況を確認したり、他の施設を紹介するなどの対応をしている。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ほほえみの家 A棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	自分が必要とされていると思って頂けるように、その方の能力に応じた役割をお願いしたり、活動に参加できるように配慮している。人生の先輩であることを職員間で共有しながら、尊敬と感謝の気持ちで接している。その効果もあり、家事に積極的に参加するようになるなど変化がみられている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	そのため2カ月に1回電話で近況報告し、利用者の健康状態や生活の様子を伝え、家族と情報共有するよう努めている。運営推進会議の委員となった家族がグループホームの事情を知ること、環境整備などに積極的に参加してくれるようになるなど変化がみられている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	馴染みの場所(昔住んでいた地域)や自宅に行ったり、訪ねてくる知人との面会や外出には柔軟に対応しているが、感染症対策による面会制限もあり知人の面会や外出は少なかった。広報誌を活用し近況報告や面会を促して行きたい。	知人の来所が少ないため、事業所の広報誌を自治会の回覧版に入れていただき、家族や知人が来所しやすいよう取り組んでいる。6月から外出可能となり自宅や温泉、認知症カフェ等に家族と一緒に出かけ利用する利用者もいる。滝沢市の介護相談員が2、3カ月に1回、理容師が2カ月に1回訪れ馴染みの関係となっている。また、B棟の1名の利用者は、クロスステッチやぬいぐるみの作成に取り組んでおり、時々こちらから訪れる手芸屋さんや馴染みになっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	利用者は役割を協力しながら行うことで、お互いが支えあい、相手を思いやる関係性が自然にできている。また職員は、利用者同士のトラブルが生じた際、お互いのダメージが残らないように調整役となって支援している。意思の疎通が難しい利用者に対し、少人数での関わり場の設けなど支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	これまでの生活環境が損なわれないように、支援の内容、注意が必要な点について情報提供している。又、退所時連絡書を使用し、詳しい情報提供に努めている。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	日々の関わりのなかで利用者の言葉や表情から意向の把握に努めている。家族から得た情報も記録に残してケアに活かしている。また、認知症状による行動や言動についても利用者の思いに寄り添うケアを実践している。	入居時に家族に記入していただいた「私の支援マップシート」を参考に利用者の思いや意向を把握し、「自分でできる事は自分でやる」ことを支援している。モップがけ、テーブル拭き、趣味の編み物等を行っている。ほとんどの利用者が思いや意向を伝えることができる。また、言葉や表情、行動から思いを汲み取り、個人チャートに記入し職員で共有し支援に繋げている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	入居する時に本人のバックグラウンドの把握に努めているが、入居後も本人の行動や面会者の情報を収集し、その方を理解するよう努めている。また、会話で得られる情報を大切に、事実関係を家族に確認したりしている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	その日の利用者の体調や気分などを把握し、どう過ごしたいか何をしたいか引き出せるよう声掛けの工夫をし、希望に沿った支援をしている。また利用者のできる力を見極めながら活躍できる場を提供している。			

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ほほえみの家 A棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	利用者の暮らしの内容や家族の意向を踏まえ、医師、リハビリ、薬剤師などの他職種の助言も得ながら希望に沿った計画を担当者が作成している。責任者が点検、確認した上カンファレンスを開催し、本人にも参加してもらっている。完成した計画は家族に説明、同意を得ている。プランの実施は全職員で行い、特記は個人記録に詳細に記入している。月1回担当者がモニタリングを行い評価につなげている。	6か月に1回介護計画の見直しを行っている。介護支援専門員有資格者が5名おり、分担して介護計画を作成している。医師や看護師、作業療法士等の助言や家族、利用者の意向を取り入れ原案を作成し、原案を基にカンファレンスを開催し介護計画を作成している。また、3か月に1回作業療法士が評価し、リハビリ計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	個別記録に日々の様子やケアの実践で気付いたこと、本人の発した言葉などを細かく記入している。その内容は介護計画の見直しに活用したり、職員間で情報共有し、利用者対応に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	通院の付き添いなど家族と利用者のその時々々の要望に応じ柔軟に対応している。感染症対策中のため外出自粛が続いており、積極的な取り組みには至らなかった。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	運営推進会議に自治会の代表や包括職員に参加して頂き、周辺情報や支援に関する情報交換、協力関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	敷地内にクリニックや薬局が併設されているため、利便性の観点から同一法人のクリニックにかかりつけ医に選んでいる家族が多い。専門科目以外の病気については家族の希望を踏まえ、他科受診で対応している。他科受診の際の付き添いは家族にお願いしているが、日常の様子分かるように記録を渡したり、電話での応答に対応している。	入居時にかかりつけ医について、家族や利用者から確認している。敷地内にあるクリニックにかかりつけ医を変更している利用者が多く、職員が同行受診している。また、皮膚科や整形外科等の受診は家族の同行受診を基本としているが、遠距離等家族の要請により職員が同行することもある。希望により月2回来所する歯科医師に受診している。医療機関の看護師が健康観察のため2週間に1回来所している。インフルエンザ等の予防接種は協力医が対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	看護師に利用者の健康状態など気になることを報告し、対応方法など助言をもらっている。医師への報告が必要な場合は、看護師が伝達する役割を担うことで、正確な情報が伝わる仕組みになっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した場合には情報提供書で本人の情報を細かく伝えるようにしている。病状説明の際には家族だけでなくグループホーム職員も極力参加し、医療機関と情報共有するなど連携をはかっている。また、早期退院が可能な場合は部屋を確保しておくなど、退院後スムーズにグループホームに戻ることができるよう対応している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	重度化等の対応指針を定めており、契約時に説明し理解を得ているが、基本的には家族の意向を尊重しながら対応している。グループホームでの看取りを希望する時は隣接する医療機関と連携して対応し、他の施設を望む場合は紹介することになっている。	「利用者の重度化及び看取り介護に関する指針」を作成し、入居時に利用者、家族に説明している。ここ2、3年は看取りを行っていない。重度化した場合は、再度、家族に説明するとともに、家族の意向を伺い介護施設や医療機関等を紹介している。	重度化した場合の対応について、法人の関係施設の職員等を講師とする研修会を開催する等により、職員のスキルアップを目指していくことを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	応急手当の勉強会を実施し習得するようにしている。また、緊急事態に対応できるようにマニュアルを整備し、周知徹底をはかっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	年2回日中と夜間想定消防訓練を実施。台風などの災害を想定しマニュアルに沿って各職員に担当を決め、物資の購入や情報収集、設備の点検を行っている。非常食も備蓄しており、災害協力員には訓練書に目を通してもらっている。	年2回、消防署の協力を得て火災を想定した避難訓練を、日中と夜間を想定し実施している。近隣の協力員への火災通報も行っている。ハザードマップで火山災害の指定区域となっており、避難場所の確認は行っている。食料3日分、医薬品、オムツ等を備蓄している。職員への連絡は、ラインで連絡網をつくり対応している。	

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	職員は利用者の尊厳を傷つけないように心掛けてケアをしている。しかし、利用者が不穏になった時に適切な対応ができず、不適切な言葉遣いやケアがみられたため、職員会議で話し合いを行った。言葉選びの大切さや言葉の速さや口調の強さなどを再認識するとともに、当グループホームのケアの考え方についても話し合いケアの統一を図った。	入浴や排泄介助の際には、特に利用者の尊厳に配慮した支援ができるよう取り組んでいる。同性介助を希望する利用者が1名おり、対応している。排泄を失敗した場合には、利用者の尊厳を傷つけないよう声掛けや誘導に配慮し対応している。利用者一人ひとりの意向を尊重しプライバシーを確保するよう、職員会議等で話し合い取り組んでいる。広報誌への写真掲載や名前の記載は、事前に同意を得ている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	利用者が生活の中で自己決定や選択が出来るように声かけの仕方を工夫している。また、自己決定出来ない方は飲み物リストを活用し、選びやすいような働きかけを行っている。誕生日の利用者には、当日にケーキや和菓子、おつまみやビールなど、本人が希望する嗜好品でお祝いしている。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ほほえみの家 A棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	散歩などその日の利用者一人ひとりの希望やペースに合わせて支援しているが、対応が難しい場合は本人に説明し、待ってもらうか他の活動に気が向くよう誘っている。また、入浴は利用者の希望する時間にするなど配慮しながら対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	定期的に理容師が来所し、カットや顔そりしてもらっている。衣類交換の際は本人と一緒にダンスから好む服を選択している。フェイスクリームをされる方は継続して行えるように家族に物品の補充を依頼している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	感染対策のため買い物は休止中だが、食事への関心や意欲を高めながら楽しめるように一緒に収穫した野菜等を使用し、季節を感じてもらえる機会を持っている。日常的には台所に入り野菜を切る、味見や味付け、盛り付け、後片付けに参加してもらっている。	職員作成の献立により、地元スーパーで食材を購入し、手作りで提供している。事業所の菜園で楽しんで収穫したトマトやピーマン、大根、きゅうり、ジャガイモ等も使用している。筍ご飯やおはぎ等季節の食材を利用した献立や誕生会のリクエスト食、ノンアルコールビール、ケーキ等は、利用者の楽しみとなっている。利用者は、皮むきや野菜を切ったり、テーブルを拭くなど、できる事を行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	食事の摂取量や一人ひとりの状況に合わせて、食事形態を変更している。水分も自由に飲めるようにポットをホールに設置し、定時の水分補給以外にも水分補給が出来るようにしている。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ほほえみの家 A棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	口腔ケアが出来る方は見守りや声掛けをし、上手く磨けない利用者は磨く能力にあわせて最後に仕上げ磨きをしている。自分で磨くことに出来ない方は口腔ケアを行い、嚥下障害による肺炎防止等に努めている。定期的な歯科往診の際に医師より助言をもらうこともある。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	一人ひとりの状態・状況に合わせて誘導等の対応をし、トイレでの排泄ができるように支援している。トイレに座った時に水の音を聞かせたり、一人になる時間を作り排泄しやすい環境となるよう工夫している。また、排泄の失敗による羞恥心に配慮するため、尿とりパッドの吸収量を検討し、適切なパッドを選ぶようにしている。	排泄チェック表を活用し、一人ひとりの排泄パターンを把握して、利用者の表情や仕草に合わせて声かけを行ってトイレ誘導し、トイレでの排泄支援に努めている。現在、布パンツを利用し自立している利用者は2名いる。ほとんどの利用者がリハビリパンツとパットを使用しており、誘導、見守り、ふき取り、ズボンの上げ下げ等の支援をしている。ポータブルトイレを3名の利用者が使用しているが、オムツを使用している利用者はいない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	玄米ご飯や雑穀ご飯を食事に取り入れている他、食物繊維の多い野菜の献立にする工夫も行っている。便秘気味の方は、看護師に相談し適切な下剤の量を調整するとともに、早い段階での下剤服用を心がけている。また、体操や運動を取り入れ自然排便を促すように心掛けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている。	利用者とその日の希望を確認し、希望に沿うようにしている。入浴を好まない利用者には同性が声をかけたり、機嫌が良い時間帯に入浴できるようセッティングする等工夫している。	毎日午後1時～5時の間に3人の入浴を基本としている。季節のゆず湯や菖蒲湯の他バスクリンを使用し利用者が楽しんで入浴できるよう工夫している。家族の希望により、専用のシャンプーを使っている利用者もいる。入浴を嫌がる利用者には、日程を変更して対応している。入浴時には、職員と昔の話を楽しく話しながらつるいでいる。入浴時に皮膚の状態を確認し必要に応じてボディクリームを塗布している。	

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ほほえみの家 A棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	コロナ禍で外出する機会が減ったが、日常的に家事や体操等で活動量を確保しており、生活リズムが整うようにしている。また、活動するだけでなく昼食後に昼寝する時間を取る等、適度な休息も取れるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	薬の処方や用量が変更されたり、本人の状態変化が見られる時はいつもより詳細な記録をとるようにしている。常時個々の薬剤情報をファイルにして、いつでも把握できるようにしている。また、かかりつけ薬局薬剤師より居宅療養管理指導を受けている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	食事作り、掃除、趣味など日常生活で出来ること出来そうなことを普段の生活の中で見極めながら役割をもっている。季節を感じられるよう掲示物で四季を表している。季節に合わせた行事だけでなく、利用者一人ひとりのやりたいことを聞きだし個別対応にて実践している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	天気の良い日はグループホーム裏のバラ園を散歩したり、畑で野菜を収穫するなど日常的に外に出る機会を設けている。その他にも感染対策をした上でドライブに出掛けたり、戸外でできる行事を開催して楽しい時間を過ごしていただいている。	天気の良い日には、玄関前での日光浴やバラ園などの事業所周辺を散歩したり、プランターの花への水遣り、菜園の野菜の収穫を楽しんでいる。市内のドライブを楽しんだり、お花見や紅葉狩り等に小岩井農場や網張、岩山等に出かけ車窓から風景をながめ楽しんでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	現在は常時お金を所持している利用者はおらず、支払いをする機会も少ない。今後はグループホーム内で売店を開きおやつ等を購入する機会を提案して行きたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	希望時は気軽に電話をかけてもらっている。年末には年賀状を出しており、なるべく自力で書いてもらうように支援している。また、職員が家族に電話する際に本人に声をかけ電話で話すきっかけ作りをしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	季節に合わせた調度品をホールに置いている。菖蒲湯・ゆず湯、水木だんごなど体験することで季節を感じられる機会も設けている。ホールには3畳の畳を敷いた和のスペースと洋のソファを配置して好みの場所で居心地よく過ごせるようにしている。	ホールには、利用者が作った季節に合わせた作品やイベント時の写真等が飾られ、季節により雛人形、水木団子、七夕飾りなどを展示している。テーブルや椅子、ソファが設置され、エアコンや加湿器で温度管理された快適な空間となっている。利用者は、テーブルやソファでテレビを視聴する等くつろいで過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	ホールの中に1人掛けのソファや椅子を設置し一人になれる空間作りを行っている。トイレや廊下に行きごとの写真や絵などを飾り、楽しめる空間づくりを行っている。気の合う利用者同士がお互いの居室を行き来し、会話を楽しんでいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	思い出の物や使い慣れた物を持参して頂くよう働きかけている。居室内はテレビや椅子などこれまで自宅で使用していた物が置かれ、本人や家族の写真、家族やグループホームからの贈り物が飾られている。備え付けの家具を使っているが、配置を変更することで、使いやすい環境になるようにしている。	エアコンやクローゼット、ベッド、筆筒、洗面台が設置されている。テレビや小筆筒、家族写真、位牌等が持ち込まれ、趣味のクロスステッチや家族の写真等が飾られている。居室は、利用者や家族の意向により配置された居心地の良い空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	シルバーカーや車椅子を利用している人が利用しやすいように座る席の調整を行っている。又、冬場は転倒防止の為にスロープに滑り止めマットを敷いている。利用者の身体状況に応じた福祉用具を活用し、利用者の行動を抑制せずに見守りで対応できるようにしている。今年度はプライバシーを保てるように、ハンデイトイレに使用中の表示を分かりやすくする掲示板と簡易的な鍵を設置した。		